

## 1. はじめに

平成 26～29 年度に発掘調査を実施した市内百津地内の「土橋北遺跡」、百津湯新田地内の「石船戸北遺跡」について、昨年 8 月から発掘調査報告書を作成するための資料整理を行ってきました。

このたび資料整理がほぼ完了しましたので、その成果についてご報告するとともに、遺跡で見つかった江戸時代の道路についてご紹介します。なお、今回のたよりでは、土橋北遺跡についてお話しします。詳しい成果は平成 31 年度に刊行予定の報告書をご覧ください。

## 2. 資料整理の成果

土橋北遺跡は百津集落の南側に位置する縄文時代後期（約 3,500 年前）と江戸時代（約 400 年前）を主体とする遺跡です。安野川の改修に伴い発掘調査が実施されました（発掘調査の詳細は、平成 29 年度「土橋北遺跡発掘調査だより」をご覧ください）。

江戸時代では、掘立柱建物と道路などが見つかりました。これらは、新発田領絵図正保四（1647）年との比較から、江戸時代の百津村と三国街道（中通り）の一部であることがわかりました（第 1 図）。南北に伸びる道路の東側には、掘立柱建物群が整然と並んでいました。

建物は身舎（もや）と下屋（げや）で構成されるものが多く、江戸時代の建物の大きさやつくりが明らかになりました。柱穴から出土した陶磁器から、これらの建物群が約 400 年前のものであることがわかりました（第 2 図）。ちょうど将軍家光の時代、島原の乱が起きた頃です。

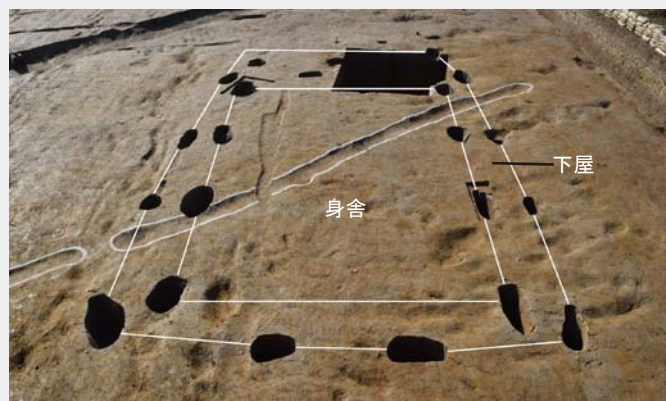
三国街道は路面と側溝からなり、側溝は掘り直された跡が見られ、継続的に維持管理が行われていたようすがうかがえます。また、道路をさえぎるように柱の列が 2 列見つかりました（第 3 図）。これらは、村境のまじないに関わるものと考えられます。

民俗例では、村境の道路の両脇に枝などを立て、「しめ縄」を張り、災いや疫病が村に入らないように入出口をさえぎる「道切り」といわれる習俗があります。県内では「大わらじ」や、「ショウキサマ」のワラ人形を掛けたり、「獅子舞」を舞ったり、「虫送り」をするなど多様なものが残っています。

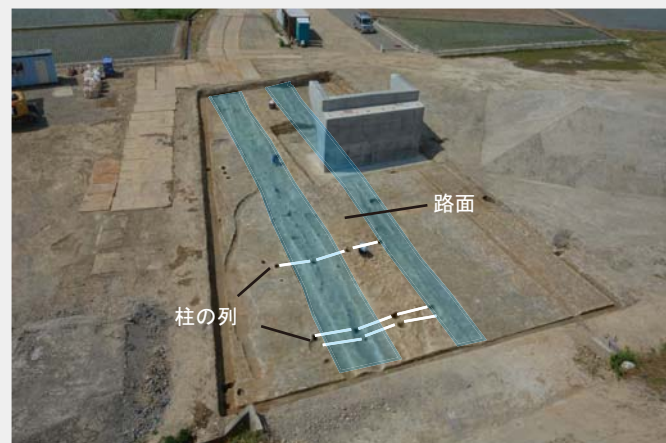
調査で見つかった柱の列は、道路をさえぎるように並ぶことから、道切りに用いられたものと思われ、当時の百津村の人びとの生活のようすを知ることができます。



第 1 図 発掘された三国街道（中通り）



第 2 図 調査で見つかった掘立柱建物



第 3 図 道路と柱の列



### 3. 江戸時代の道路からわかること

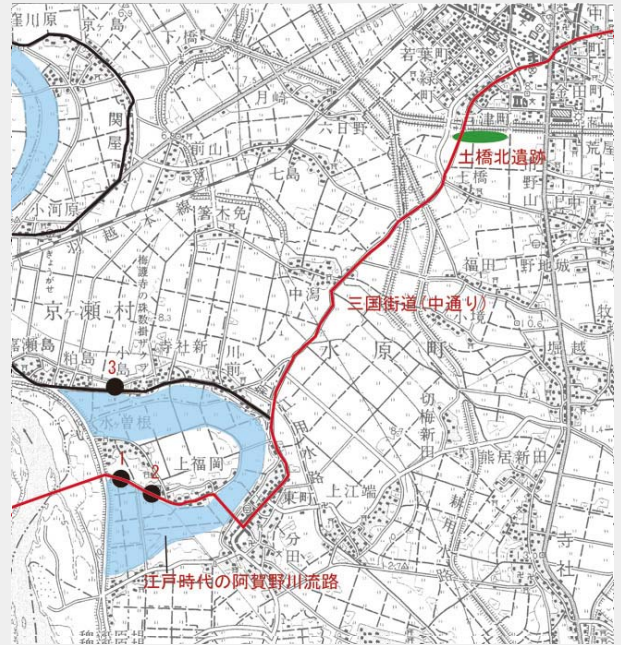
資料整理では、三国街道のルートが何回も変わっていることがわかりました。阿賀野川の流路が影響していたようです。先述した新発田領絵図から、約 280 年前までの阿賀野川は、第 4 図のように上福岡-分田の間を流れていたと考えられます。この頃の三国街道は、分田-百津-中島へと向かいます。

実際にこのルートを行くと、西岡付近には「文政二(1819)年」と刻まれた庚申塔があります(第 5・6 図)。庚申塔は街道沿いや村境につくられることが多かったようです。さらに約 200m進むと、諏訪神社の境内に石碑があります(第 7 図)。石碑には「入船」の文字が見え、船による往来があったことを証明しています。また、三国街道から分岐して、川前-小島-下里へ向かう途中、「珠数掛ザクラ」で有名な梅護寺を過ぎて間もなく、右手に馬頭観音があります(第 8・9 図)。馬頭観音は馬に関わる信仰対象で、道中で死んだ馬を弔うため、道端につくられることが多かったようです。

ふだん何気なく通る道路ですが、ゆっくり歩いてみると、このように江戸時代の名残りがたくさん残っています。

#### 参考文献

- 新発田古地図等刊行会 1976『新発田領絵図』
- 新潟県教育委員会 1995『新潟県歴史の道調査報告書第八集 三国街道中通り』
- 鶴巻武則 2012「所作による新潟県域の道切り」『高志路』第 385 号 新潟県民俗学会



第 4 図 道路と石造物



第 5 図 1. 西岡付近の庚申塔 (1)



第 6 図 1. 西岡付近の庚申塔 (2)



第 7 図 2. 諏訪神社の石碑



第 8 図 3. 小島付近の馬頭観音 (1)



第 9 図 3. 小島付近の馬頭観音 (2)